

果てのないカレンの武装抵抗

ビルマの辺境 歴史と民族の隙間に生きる人びと

宇田有二

夢うつつの中で迫撃砲の音を聞いた。反射的に時間を確認する。朝五時四〇分だ。日が昇るまで、まだ一時間半ほどある。この音は、「新世紀」の幕開けの祝砲か。

私は、東南アジアの一角、タイ国境に近いビルマ山中で新年を迎えた。十月半ばから始まる乾季のど真ん中、一年での冷え込みが一番きつい時期だ。三十五度近い日中の気温は、夜明け前後には五度を下回る。何がつらいかといえば、その気温の差である。床につくのは囲炉裏の真横だ。厚手のジャケットを着込み、さらに毛布を2枚重ね、寒さに耐える。

ビルマ国内での、止むことのない「内戦」は、今年一月末で五十三年目を迎えた。カレン人を中心とする辺境諸民族のビルマ軍事政権に対する自治権獲得闘争は、これからも続くようだ。

寒さをしのぐようと、火の落ちかけた囲炉裏に身体をすりよせる。カレン語で「プダ」と呼ばれる竹箆の床が、ギシツと音を立てた。

- 1 -

砲弾の爆発音は十分ほどでやんだ。静かな夜明け前の静寂が戻る。前日となんら変わらない朝を迎え、鶏ががけたたましく鳴き始めた。

「二〇世紀は戦争の世紀だった」。過去形で呼ぶのは、ここでは全く無意味だ。また「世紀」という枠組みで彼ら、カレン人の存在を捉えるのも、可笑しい。「新世紀」を迎えたといっても、西暦二〇〇一年の夜明けは、カレン歴によると二七四〇年である。とりわけ特筆すべ区切りの年ではない。

「カレン人の土地には、その土地の時間の流れがある」

寝不足と寒さの中、ぼんやりとした頭でそんなことを考える。昨日と全く同じ、平和な村の朝を迎えると、自分が最前線にいることも忘れてしまう。

ビルマは一九八九年、閉鎖的なビルマ式社会主義政策から開放政策へと方針を変えた。そのため、タイ国境を中心に、密貿易に財政的基盤を置いていたカレン人武装組織・KNU（カレン民族同盟）は、急激に勢力を失い始めた。

「どうしたらいいのか、われわれは」

タイ・ビルマ国境に点在するカレン人難民キャンプで、避難民によくたずねられた。キャンプの責任者からも同じような質問が寄せられる。難民キャンプ内ではこの二、三年、自分たちの生活、さらには

- 2 -

カレン民族の行く末を不安に思う人たちが表立って声を上げ始めた。これまでKNU幹部の顔色をうかがって発言していた人たちも、KNU幹部たちの指導力低下を、はつきりと嘆いている。

「自分たちの事は自分たちで考えなければならぬ」。そんな意識の現れのようなのである。ビルマ軍事政権に抵抗する最大勢力のカレン組織もまた、長年の戦闘の厭戦から結束力が弱まってきた。

私はこの数年、タイ・ビルマ国境に拠点を構えるKNUの幹部に毎度、同じ質問を繰り返している。

「今後の展開をどうするのか」

「我々はビルマ人の町に攻め入っているのではない。ビルマ人がわれわれの土地に、武力で入ってきているのだ。正義はこちら側にあるのだ。われわれは、最後の一人になっても闘い続ける。この抵抗闘争があと五〇年続いてもだ」。返事はいつも同じだった。

KNUの内部分裂を引き起こす要因はいくつもある。何よりも、KNU指導部自体が、国際社会の変動に見合った組織改革に抵抗している。次第に私は、KNUへの取材に対して意欲を失い始めていた。

そんな時だった。一九八六年から九〇年代前半まで、KNUの軍事部門KNLA（カレン民族解放戦線）に義勇兵として参加していたフランス人のF・ジョンに言われた。

- 3 -

「ボ・ジョー司令官に会わずして、今後のカレンを語ることはできないよ。KNLAの士官学校を出た唯一の司令官だし、まだ若い。おまえと同じくらいの年齢のはずだ。今後のカレンを背負う若いリーダーの最有力候補だ。カレンに見切りをつけるは、彼と会ってからでも遅くないぞ」

何事も大げさに話をするジョンの話は、すぐに信じられない。知り合いの元KNLA兵（五五）を訪ねた。彼は、筋金入りの元ゲリラ兵士で、ボ・ジョー司令官に詳しくかった。

「そうさな、ボ・ジョーくらいかな、これから期待がもてるのは。ヤツはまだ若い。滅多に山から下りてこない。他のKNUの幹部連中は山を下りて、ほとんどタイ側に隠れ拠点を持っている。でも、ヤツはずっと山の中に籠もってカレンの村人と一緒に生活しているんだ」

KNLAは、大きく分けて7つの旅団で構成されている。現在の最強旅団は、最年長七四歳のティーマウン司令官率いる第七旅団である。最若年のボ・ジョー司令官は三〇代後半。ボ・ジョーの次に若い司令官は、六二歳の第四旅団司令官のオリバー。同じく六二歳の第六旅団の司令官ムトーである。勇敢で、頭の切れると言われるボ・ジョーが、今のカレンの状況、今後のカレンの状況をどう見ているのか、直接話をしてみたい。私は是非彼に会っておかねば

- 4 -

と思った。

二〇〇〇年一月二十三日、カレン民族解放戦線第五旅団をめざして、タイ・ビルマ国境へ向かった。タイ北部の町メーサリアンにたどり着く。そこから公の交通機関を使い、さらに奥地へ。名のない村に入る。その町で二泊し、連絡係のカレン人を待つ。連絡係のカレン人に、タイ語・ビルマ語・カレン語・英語を話す通訳と四輪駆動車を手配してもらう。

窓ガラスに黒いシートを張った四輪駆動車は、ビルマ国境へ向かって舗装された国道を走る。タイの国境検問所を超え、車がやっと通れるだけの未舗装の道へと入る。二時間も走ると、どこをどう走っているのか分からない。途中、タイ国境警備隊の交代要員を一名乗せ、さらに奥地に車を走らせる。

右手に突然、明るい風景が開けた。サルウィン河にたどり着いたのだ。サルウィン河は、タイとビルマを分ける自然の国境線である。切り立った斜面のあちこちには、不法に伐採されたチークの大木がころがっている。枝が切りとられ、白いペイントを通し番号も振られている。

河沿いに監視小屋が並んで三つ建つ。そのうち一つに入って、ビルマ側に渡るボートを待つ。だが、なにやら雰囲気がおかしい。国境を警戒するタイの情報部員に見つかってしまった。そのタイの情報部

- 5 -

員は私の前には姿を見せない。隣の小屋に入ったまま、通訳を通して私の身元を探っている。案内役のカレン人通訳では、情報部員を説得して私がビルマ側に渡る理由を納得させられないようだ。

ビルマ側のカレン支配区に無線を飛ばした。無線連絡を受けて半時間後に姿を現したのは、サルウィン河周辺を管轄するKNLA将校ド・ウイン氏であった。彼の一言は、タイの情報部員を納得させた。

「この日本人は、カレンの新年祭取材のため、ちょっとだけビルマ側に渡るんだ、何も問題ない」

小型エンジンがついたボートでサルウィン河を一時間ほどさかのぼる。乾季の空は真っ青だ。しかし、河の水は濁っている。季節に関わらず一年中、土砂を北から南へと流し続ける大河だ。やっと、次の中継地点へたどり着いた。緊張の糸がゆるむ。時計はほとんど役に立たない山の生活だが、国境を越えた習慣として腕時計を三十分遅らせ、ビルマ時間に合わせる。

連絡が入った。次の中継地点へ移動するのに、河原沿いのカレンの村であと二日間待たなければならぬ。サルウィン河を目の前にした小屋でくつろげるなら、願ってもない。河の冷たい水で身体を洗う。河で水浴びをすると、やっと戻ってきたんだな、という感覚が戻ってくる。河を隔てて、タイ領がすぐ

- 6 -

目の前にあるといっても、ここはビルマ領内のカレン解放区だ。気を抜くのは禁物だ。いつビルマ軍の奇襲に遭うかわからない。

チベット高原に源を持つ全長約二四〇〇kmのサルウィン河は、途中タイ・ビルマを隔てる国境となり、アダムン海に注ぎ込む。英語でいう「サルウィン」とは、ビルマ語のタンルインがなまった呼び方で、カレン語では「ホロー・クロー」と言う。ホロー・クローとはカレン語で、「(北から南へ)下る・移動する河」を意味する。

次の出発を待っている間に幸運に恵まれた。本来にカレンの新年を祝う集いに参加することができたのだ。今年のカレンの新年は、一月二十五日だ。夜明けを待たずして、近辺の村から家族総出でカレンの村人が集まってきていた。三十名ほどのカレン兵が整列し、これまでの戦闘で命を落とした兵士に対して黙祷を捧げ、ギターを片手に歌う、簡単な儀式である。

写真を何枚か撮す。帰国後、写真に写ったカレン兵を眺めていた。一人ひとり兵士の表情を確認する。すると、なんと、タイ側で何度か顔合わせをしたタイの情報部員が写っていた。カレン兵士面と一緒に整列している。これは一体どういふことだ。

ビルマ国内とその周辺では現在、三つの「争い」

- 7 -

が続いている。一つは、国内の民主化を巡る闘争。二つ目に、民族自治の獲得を目指す武力抵抗。最後に、今年二月から北タイ国境でビルマ軍とタイ軍が戦火を交えた、麻薬を巡る紛争である。ビルマの問題を語るとき、この三つは互いに関連しており、どの一つも見落とすことはできない。このうち、国内の民主化と麻薬問題を巡る紛争に関して、国際的な監視は続けられている。いわゆる「人権」と「麻薬」は、国際的な関心事だからである。

ところが、民族自治の問題を巡る問題は現在、ほとんど触れられることはない。ビルマ以外の第三国には利害関係がないからである。国際社会は一般的に、民族の独立問題は一九六〇年代に終わったというのが大勢のようだ。しかし、「二〇世紀は戦争の世紀だった」。たった一年前が過去のものとして表現される。そんなとき、アジアの国境で今も、世界最長の内戦が続いているという事実には触れられない。

ビルマでは独立前からの内戦状態が、今も続く。もともと、ビルマは、河や山脈を越えて異なった民族集団が群雄割拠していた。英仏の植民地侵略に巻き込まれたビルマは、それこそ人為的に国境線が引かれた国なのだ。英国の植民地政策は、首都周辺と「辺境地域」を分けて支配する形態をとった。そのため「辺境」に住んでいた諸民族は、中央政府に属している国民という概念は全くなかった。

- 8 -

日本がビルマに侵攻した一九四二年、日本の特務機関「南機関」によって指導されたビルマ独立義勇軍（B I A）は、ビルマと対立する英軍に加わっていたカレン兵と、武装解除を巡って衝突した。この時多数のカレン人がビルマ人に殺された。このことが大きな出発点になり、ビルマ独立後のカレン人の反乱とビルマ人不信へとつながっていく。

一九四〇年代に火を噴き、ビルマ辺境で抵抗を続けている、いわゆる「少数民族」のうち、現在も武器を持って軍事政権に抵抗闘争を続けている最強の民族集団は、主にカレン人である。カレン人はもともと、モンゴルから中国雲南を経て、ビルマに下つて来たと伝えられている。人口約二〇〇万〜六〇〇万人のカレン人は、その言語形態から、大きく分けてスゴーカーレンとポーカレンの二つに別れる。

他の民族集団に比べ、どうしてカレンだけが強固な反政府抵抗を続けてこれたのだろうか。英国植民地の末期、英国＋カレン人に対して、日本＋ビルマ人という勢力図式ができあがっていた。カレン人は英国の指導のもと、民族団体としてはかなり組織化が進んでいた。独立後、ビルマ政府に反旗を翻すときのカレン人の結束は、単なるゲリラ組織と言うより、政務機関をいくつももった、国家にかなり近い組織体を作り上げることに成功していた。それに

カレン人は、ビルマにおける自由を求める闘争の先駆者でもあった。一八八一年、ビルマを含む英領インドにおいて最初の政治組織（K N A）を組織したのはカレン人である。これは、インド国民会議（I N C）結成の四年も前のことであった。

一九九三年五月半ば、雨季はすぐ目の前に迫っていた。私はカレンの地、K N Uの本拠地コートレイ国（Kawthle）＝カレン語で「花咲く大地」「平和な大地」の意）の中心地、マナプロウ総司令部に入る計画をしていた。マナプロウは、ビルマ軍事政権に抵抗する辺境の諸民族の連合組織・国民民主戦線（N D F）の司令部でもあった。また、一九八八年に起きた民主化デモの弾圧から逃れてきたビルマ人たちとの結集団体・ビルマ民主戦線（D A B）の総司令部も兼ねていた。

マナプロウ入りしたことのある日本人記者の紹介状を携えた私は、タイ第2の都市チェンマイと向かった。名前と住所、電話番号だけをたよりに、紹介された人を訪ねていった。だが、教えられた人物はもはや、その住所には住んでいなかった。

とりあえず、できるだけビルマに近い国境の町メーサリアンへと移ることにした。しかし、そこでどうにかなる当てなど全くなかった。時間つぶしに、また、かすかな希望を持って、サルウィン河へと向

かってみることにした。メーサリアンからピックアップトラックの後部を改造したバスで約二時間、サルウィン河の町メーサムレップにたどり着いた。河の向こうはもうビルマ領だ。しかし、タイ語もビルマ語もできない私は途方に暮れた。

三日間、当てもなくただただ、メーサリアンとメーサムレップを往復する日を繰り返していた。四日目の朝、いつものようにピックアップトラックの後部に取り込むと、若いカップルと一緒にあった。何を思ったのか、私は英語で話しかけてみた。

「どこへいくのですか。私はカレン人を探して、メーサム・レップまでいくんですけど」

若い男が何のてらいもなく答えてくれた。

「どこから来たのか。ふうん、日本人か。私たちはカレン人だよ。これからこの娘をマナプロウに送り届けるんだ。彼女はそこで看護学校に通うことになってるんだ」

マナプロウ。

それこそが私が行きたいと思っていたKNUの本拠地ではないか。見も知らぬ外国人に簡単にそんなことを喋ってもいいのか。ちよつと不審に思った。

だがその時は、彼らの行動方が気になっていた。

メーサムレップに到着した。河岸まで行く彼らについて行き、ビルマ側に渡るボートのすぐ側まで一緒に行動した。外国人である私の姿を見ても、周り

の誰も不審がつている様子はない。ボートの乗り込んだ二人に、「気をつけて」と手を振って、見送った。

翌朝、私はメーサリアンのホテルを引き払う。タイに持ってきた全ての荷物を持った私は、前日若いカップルがボートに乗り込んだ場所に立った。

「マナプロウに行きたい」。私はボートの運転手にそれだけ告げた。

後日判明したのだが、当時、メーサムレップはKNUと地元タイ警察・国境警備軍の友好関係の下にあった。KNUに支援する外国人がメーサムレップをうるつくことはそう珍しいことではなかった。

マナプロウ到着後、外国人慣れ、取材慣れしているKNUの広報官に迎え入れられた。「どうぞ、取材はご自由に」と。

「反政府ゲリラ拠点への潜入!」。映画のような冒険談などではなかった。ちよつと拍子抜けする。

マナプロウに四ヶ月近く生活するうち、「来る者は誰でも受け入れる」。そんなKNUの体質を徐々に理解し始めた。緊張感はあまりなかった。しかし、マナプロウでの生活は楽ではなかった。一〇m先が見えなくなる激しい雨。一週間放置しておくだけでカメラのレンズにかびが生えてくる、そんな湿度の高い環境。この時期に長期間、ジャングルの中に入り込んで取材を始める者はいなかった。また、雨季の最中、病気の発生率も高くなる。マラリアやデング

熱にはかかって当然、運が悪いとコレラや破傷風にも感染する。

KNUを医療面で援助する米国の団体が、医師一名と看護婦二名を派遣していた。そのうち医師と看護婦は、一ヶ月もたたないうちにマリアに罹り、マナプロウを後にすることになった。その他、マナプロウには、コートレイ領内や難民キャンプで英語を教える欧米人が数名出入りしていた。ときに軍事指導の米国人が数名現れたり、KNLAに義勇兵として参加している仏人や日本の若者も目にした。

雨季の期間は、敵味方とも補給路が確保できないので戦闘にもならない。私は暇をもてあましていた。それは司令部とて例外でなかった。勢い、KNUの幹部連中と親しくなった。彼らから、カレンの闘争史やビルマの実情など、じっくりと話を聞くことができた。

今はタイの町に住むKNUの幹部の一人、Dに会ったのもその時である。

「外国からの報道陣はすぐに、『カレンやカチンなどの民族がなぜ闘っているのか』と聞くけど、我々のやっっていることを戦闘(fighting)だと軽々しく表現して欲しくないなあ。我々はあくまでも抵抗(resistance)しているんだから。そのことを勘違いする者が多い。また、君もそうだけど、ビルマ軍政府の抑圧に対して、では『少数民族(minority)』は

どうするのか」とも質問する。でも決して、軍政側、ビルマ人側のことを『多数派(majority)』って表現しないね。なぜかね。人口の多い少ないで、区別するそういうやり方には納得しないよ。どうしてそんな呼び方をするのか。ビルマ人とカレン人はあくまでも平等なんだから。我々は、カレンはカレンであり、カチンはカチンであるのに。人口の多い、少ないで区別はしてほしくない。そんな君らの基準を持ち込んで欲しくない」

それ以後私は、特に「多数派」と比較する場合を除いて、「少数民族」という言葉の代わりに「民族集団(ethnic group)言葉を使うようになった。

マナプロウに到着して2週間目の一九九三年年六月一日(火)、ようやく最前線に行く許可が下りた。

あれから八年半後の二〇〇〇年十二月、当時と同じサルウィン河の、ほぼ同じ地域をさかのぼる。当時は激しい雨の中のボート移動だった。しかし今回は、薄暗い闇の中を、ボートを走らせることになった。

カレンの取材を始めてこのかた、遠目にビルマ軍の兵士の姿は何度か見かけたことはある。だが、実際にカレン軍とビルマ軍の戦闘に巻き込まれたことはない。戦闘は暗闇のゲリラ戦が多いため、事実上撮影は不可能だ。また、実際に戦闘で命を失った兵

士を見たのは九十三年が最初で最後だった。

それは今回と同じように、サルウィン河をさかのぼって、KNLA二〇大隊の展開する前線に向かっていたときだ。雨季特有の猛烈な雨で目の前が見えなくなっていた。ボートには、タイ側で買い付けをし終えたビルマカレンの村人で満員だった。ボートの喫水線はとうに超え、船の中に水がジャバジャバ入ってきた。船の中央部に腰をおろす。目の高さに水面があつた。

その時、目の前を、布に包まれた黒い物体がゆっくりと流れていった。隣にいた当時の案内役ケ・ピ―が言った。

「殺され、河に捨てられたビルマ兵士だ」

思い出に浸っている場合ではない。カレンの新年祭に参加した二日後、約束通りに、次の中継点へ移動する連絡が来た。KNLAの将校ド・ウイン氏は、タイの情報部員の裏をかいて、私を秘密のボート乗り場へと連れて行った。午後五時半過ぎ、迎えのボートが来る。カレン兵士二二名を乗せたボートは、タイの国旗を舳先につけ、サルウィン河を北へと進路を取る。三〇分もすると太陽が傾き、あたりは急激に暗くなってきた。正面に明るい星が現れた。しかし、星に見入っている余裕はない。星と月明かりの光だけで、鉛色をした河の水面を、ボートは右に

- 15 -

左に揺れながら疾走する。水しぶきがかかる。兵士たちは毛布を前にかぶり、飛沫を除ける。昼間の暑さが嘘のように急に寒さが襲ってくる。さらに三〇分ほど経過した。

隣りに座っていたカレン人のシュラセー（二六）が流ちょうな英語で、「あそこはビルマ兵士のいるところだ。時々撃ってくるんだ」と左側を指差した。そこは、かつてカレン軍の兵站基地であつたタイムタだった。私も以前、何度か立ち寄つたことがある。しかし、こんなところで狙い撃ちされたら一巻の終わりだ。右岸に目をやり、タイ領へと泳ぎ渡ることが出来るか、目測する。しかし、そんな緊張感も忘れるくらいに、風の音、水の音、エンジンの音が心地よく耳に響く。

星と月のかすかな明るさでも、ボートは右に左に、水面から突き出た岩を避けて、走り続ける。地形を身体で覚えている舵手の櫂さばきは軽やかだ。いつの間にか降るような星空になっていた。急に心が穏やかになった。まばたきをするたびに星が姿を増していく。いつのまにか満天の星である。

シュラセーは、カレン難民の国内避難民（IDP）
＝ရှမ်းပြည်ထောင်စုအတွင်းပြည်သူများ＝Shan State IDP

である。兵士ではないから武器は持っていない。彼の持ち物は、小さな布製の肩掛けカバン一つである。

- 16 -

そのカバンの中には、手のひらサイズの常備薬袋、小型ビデオカメラ、Tシャツの予備、それに薄手のパーカーだけがはいっている。

タイ側に難民としてのがれたカレン人には、外国からの援助は届く。しかし、ビルマ国内の山の中に逃げ込み、ビルマ軍の迫害をのがれて隠れ住んでいる国内避難民には援助の手が行き届かない。その総計は、おそらくタイ側にのがれた難民の数倍、数十万人軽く超えていると見られている。しかし、検証は不可能だ。

村を襲撃され、山に逃げ込んだ農民がいると言う情報が入ると、彼はその存在を確認するためにビデオカメラを持って、一人で山に入っていくのだ。護衛のカレン兵士と一緒に動く事はできない。兵士の動きをビルマ軍に察知されてしまうと、そこにカレン人が隠れていると分かってしまうからだ。また、ビルマ軍の警戒線をぬって、知らない土地を行動するため、地雷原に迷い込んでしまう恐れもある。しかし、彼は、どこかに逃げ込んだ村人がいると聞けば、行動を起こす。

「六十四人の農民が身動き取れずに山の中にいるんだ。どうだ、是非、一緒行ってみないか」
ビルマ軍と地雷は怖いが、行ってみたい気はする。やはり自分の目で見ておきたいからだ。しかし、今回は時間的に不可能だ。

- 17 -

「今回は、遠慮しとくよ。ボ・ジョーに会いに行くから」

「そうか、ボ・ジョーに会いに行くのか。じゃあ仕方ないな」

残念そうな表情をした彼も、ボ・ジョーの名前を聞くと、納得したようだった。

腕時計の針が八時を回った。ドラム缶でいかだを組み、二艘のボートを横に合わせた水上小屋があらわれた。次の中継地点に着いたのだ。ロウソクの灯りの下、次の案内役のデイ・ゲ（二十六）を紹介される。彼もまた英語が達者である。今回、ボートでの移動が可能だった。そのおかげで、山歩きを三、四日分短縮することができた。あと、二日弱歩けばいいんだ。

一九九五年一月、マナプロウが陥落した。その後、タイの国境警備隊を避け、知り合いのカレン人Dの家に、隠れるように泊まり込んだ。そのとき、Dの元に、タイ側に住むタイカレンのおばあさんが訪ねてきた。

「タイ側に住んでいる親戚なんです。そう紹介された。二つの国を隔てるサルウィン河をはさんで、人為的に引かれた国境線が、一つの民族、一つの家族関係を分断している。」

また、キャンプ内で、スゴーカーレン人とポーカレ

- 18 -

ン人の話に耳を傾けていたとき、彼らがビルマ語を使って話をしてるのに気づいた。「あれ、なんで」と思った。後で説明を聞いた。人口の多いスゴークレン人はポーカレンの言葉を十分に理解できないらしい。言葉は違うのだ。でも、彼らは同じ「カレン民族」として文化や歴史を共有している。「言葉が違えば、民族が違う」。そういう民族の分類方法もここでは通用しない。いったい誰がこんな民族の区別をするようになったのか。国家にしても、民族にしても、我々はどんな基準で区別してきたのだろうか。

一九九〇年の総選挙の結果を反古にし、武力で政権を維持し続ける現在のビルマ軍政権は説明する。

「ビルマには百三十五もの異なった民族がいる。それらをまとめ上げるには、今の政権以外では不可能だ」。ビルマ国内の民族数は、四〇弱とする説もある。自らに都合のいい考え方にしがみつく権力者の姿だ。そんなビルマ軍政権に同調するアセアン諸国と日本政府。

カレンの取材にも慣れた一九九八年の夏、久しぶりにメーサムレップにやってきた。KNUと袂を分かち、ビルマ軍政権下に入ったDKBO（民主カレ

ン仏教徒同盟)の兵士たちが越境を繰り返して、タイの村やカレン人難民キャンプに襲撃を続けていたころだ。

メーサムレップはタイ国境軍によって嚴重に警備されていた。サルウィン河の対岸には、赤いビルマ国旗とDKBA（民主カレン仏教徒軍）DKBOの軍事部門)の黄色い旗が並んでたためている。メーサムレップは勝手知った所だ。タイ兵士の警備線をすり抜け、サルウィン河の岸辺まで行った。そこで、ボートを借り切り、ビルマ側へ上陸した。

ビルマ側では、すぐに警戒の兵士がやって来た。私は「ニラゲー、ワラゲー（こんにちわ、こんにちは）」とカレン語で挨拶した。だが、彼にカレン語は通じなかった。どうやらその警備兵はビルマ兵らしい。

「将校に会いたいんだが」と指で肩章を示す仕草をした。

「ノー、ノー、ミャンマー、タイ、タイ、（だめ、だめ、ここはミャンマーだ、タイへ、タイへ帰りなさい）」

明らかにその兵士は、いきなり河を渡ってきた外国人にとまどっていた。

「ナム、ナム（水、水）」とタイ語を言いながら、額の汗を拭く。

「暑いから、水だけでも飲ませて」と今度は英語で

話しかけながら、近くの小屋に上がり込んだ。小屋の中には自動小銃（M16）をかついだ兵士が数名座っていた。これは絵になる。あわててシャツターを切った。だが、完全な逆光で絵にはならない。フラッシュさえあれば・・・。

「だめ、だめ、帰りなさい」。カメラを出して写真を撮った瞬間、語調が強くなった。雰囲気が変わった。仕方ないなあ。帰りはビルマ軍のボートでタイ側に送ってもらった。

近くのタイ軍の警備小屋に行ってみた。国境警備の兵士がのんびりとハンモックに寝っ転がっている。「おう、ニップン（日本人）か。パスポートを見せろ」

彼はぶっきらぼうに、しかし親しみを込めて言った。私は素直にパスポートを差し出した。

「何しにきたんだ。ここは危ないぞ、向こうのビルマ兵はいつ攻めてくるかもしれないからなあ」

対岸に顔を向け、銃を構える格好をする。彼と、日本車の性能の良さ、電化製品の素晴らしさ、タイの生活など、とりとめのない世間話をしばらくしていた。そのとき対岸からボートが一艘着いた。

「ほら来た、ビルマ兵だ」

Tシャツにジーパン姿の若い男たちが一〇人ほど、ボートから下りてきた。

「ビルマ兵がタイ側に渡って来てもいいのか。あんたら、何もしないのか」

「いいんだ、私服で来て、買い物をして帰るだけなら別にいいんだ」

何か釈然としなかった。

腹ごしらえをしようと、近くの食堂に入る。すると、先ほどの私服のビルマ兵が何人かいる。この食堂は、KNUの息のかかったカレン人も出入りしている。タイ・ビルマ国境の小さな食堂の中に、紛争の当事者であるビルマ人、タイ人、カレン人が、微妙な緊張のもとご飯を食べている。しかし、何ら問題は起きないようだ。いったい全体彼らの紛争の原因は何なのか、理解を超える現実を前にして、私もまた、カオパッド（タイチャーハン）を口にすると。

ビルマ取材は、タイ国境を越えての取材ばかりでない。これまで三度、首都ラングーンに入り、ビルマの各地を訪れた。しかし、行動するにはかなりの限界を感じた。

ラングーン中央駅近くのスラム街へ入り込み、ぶらぶら歩きながら撮影をしていた。すると、私の背後から一人の男が現れ、「ここは外国人のはいる地区ではない」と追い出された。また、高架橋の建設現場で働く子どもたちの姿を撮影していたとき、「出ていけ、写真撮影をやめろ」と、現場監督から怒鳴ら

れた。ビルマ国内でビルマの人に怒鳴られた経験はこれが初めてであった。建設現場を後にして二区画を過ぎるまで、二人の若い男がずっと私の後をついてきた。

ある時、カレン人の多い地方に、船に乗って行ってみた。船着き場に着くやいなや、役所に連れて行かれた。詰問調で、その土地にやってきた目的・滞在ホテル名・予定行動・滞在期間・帰りの日付予定を聞かれ、書類に記入させられたのだ。

もちろんビルマ語が話せない私は、その土地の人に話を聞けるわけではない。たまに英語や日本語を話すビルマ人に出会うが、政治的な話はもちろんできない。どこで誰が話を聞いているのか分からない。外国人と話をした、接触したというだけで投獄の恐れがあるところなのだ。

ビルマには昨年、約二三五、〇〇〇人の観光客が訪れた。そのうち何名が、観光客に見せない裏のビルマの姿を把握できたのだろうか。

「軍事政権が力で国民を押しさえつけている」

民主化を求めるビルマの人々がそう訴えても、観光客として観光地のみを訪れる人にはその本当の姿は見えない。笑顔で接してくれるビルマの人に感動し、その好印象だけで旅を終える。逆に、「メディアの報道するビルマは上げさすぎる。なにもないじゃないか」とも評される。

「よく来てくれたね。君の来る連絡は入っていたよ。ここまで来てくれたジャーナリストは君が初めてだ。疲れただろう、まあゆっくりしてくれ」

二〇〇〇十二月二十七日、KNLA第五旅団司令部があるタダダー村に到着した。近くの小川で水浴びを終えたばかりのボ・ジョー司令官が出迎えてくれた。

胸からお腹にかけて長さ四〇cmほどの傷跡がある。左のこめかみにある五〇〇円玉大の被弾の跡も目立つ。笑って出迎えてくれたが、なんだか寡黙な感じのする人だ。また、軍服を着なければ、精悍な農夫という感じである。

タダダー村には十二戸あまり、約五〇〇人のスゴーカレン人が住んでいる。司令部はその村のど真ん中、四方を開けた田圃に囲まれているところに位置する。また司令部の敷地内には、一〇mを軽く超える背丈の、天を突く竹が何本ものびている。風が吹くと、ザザザーと竹の息吹を奏でる。照りつける太陽を、大竹の影がさえぎり、司令部の中は涼しさを感じる。

ボ・ジョー司令官専用の建物は、ベッドが一つ入れば、それだけで窮屈になる小さな小屋であった。これが、ビルマ軍が恐れる、カレン民族解放戦線第五旅団司令官が寝起きしている場所であった。

スゴーカーレンの父とポーカレンの母を持つボ・ジョーは、兄二人、姉四人、弟二人がいる。子だくさんのカレン人の中でも大家族の方である。

「せっかく来てくれたのにすまないね。私は明日の朝早く、山奥へと出かけなければならぬ。帰りは年明けの二日になると思う。もし君さえ良ければ一緒に来てもいいんだが」

タダダー村から歩いて四〇分くらいの場所にビルマ軍が前線基地を築いている。この第5旅団の司令部に攻撃をしかけてこないのだろうか。

「一年ほど前に大きな攻撃があったが、それからさつぱりだなあ。もし、攻撃しても我々はすぐにゲリラ戦に転じるから心配ないよ。ビルマ軍の補給路を断てばいいことだから。我々は弾の最後の一つまで闘い続けるつもりだよ」

サルウィン河から司令部まで案内してくれたディゲが、引き続き説明してくれた。

「こつちからは滅多なことで攻撃をしかけませんよ。そうしたら本当に『戦争』になってしまうからね。」

それに、ビルマ兵士にしても、わざわざこんな山中で命を落とすたくないでしょう。貧しくて、喰えずに兵士になったビルマ人も、何のために闘っているのかよく分かっていない。戦意は本当に低いよ」

できれば、銃火を交えたくないのは、前線の兵士の偽らざる心境かもしれない。

ボ・ジョー司令官と二人つきりになったとき、カレンの現状について、率直に聞いた。

「カレン人のこと、カレンの今の戦闘のことを考えると、実は夜も眠ることができないだ。昨日も二時間しか眠ることができなかった。考え込むと、気が狂わんばかりになる。一体どうしたらいいのか」
私に問いかけるように話す。

カレン人として、また兵士として十六年間、どんなときに幸せを感じたのだろうか。

「never never really happy (幸せなんて、いまだかつて感じたことなかったよ)」

単語を一言ずつ句切りながら、絞り出すような口調で続けた。

「でも、兵士としてKNLAに参加したとき、私は誓ったんだ。『兵士となったからには明日死ぬかも知れない運命だ。しかし、カレンのために最後まで闘うんだ』と。今、我々が今、武器を持つのを止めると、我々は確実にビルマ軍に滅ぼされてしまう」

私は、どう続いているのか分からなかった。九十二年、私が中米エルサルバドルの停戦時に目の当たりにした経験を語った。

「その時、山にこもっていたエルサルバドルのゲリラたちは、胸を張って山を下りてきたんだ。そんな彼らを市民たちは熱狂的に迎えた。そんなこともあ

ったんだよ」

遙か遠い中米ゲリラの話、私が見たKNUの現状、さらに過去訪れたビルマの町の様子を夜遅くまで話した。ボ・ジョーは熱心に私の話に聞き入ってくれた。

その夜、デイゲが、密かに私に告げた。

「明日からの行軍はかなりきつくなるから、来ない方がいいです。できればこの場所でボ・ジョーを待っていて欲しい」

ボ・ジョーと一緒にいる時間は限られている。そう思うと、できるだけ話をしてたかった。だが、デイゲがそう話すには何か理由があるのだろう。ボ・ジョーへの同行は諦めた。

翌朝、目が覚めると、ボ・ジョーは既に司令部を後にしていた。

「新世紀」の朝を迎えた。朝八時過ぎ、ようやく身体が動く暖かさになった。司令部の広場の隅で、たき火を囲んで人の輪が出来ている。声を張り上げて話しているのはレゲーじいさんだ。タダダー村はずれに住んでいる元村長さん。年齢は教えてくれない。

彼の話す流ちょうな英語は、ラジオと書物から学んだという。私に得意げに話しかけてきた。

- 27 -

「昨日の夜、ランチャー（迫撃砲）の音聞いたか」

「2発、3発聞いたよ」

「ボ・ジョーの率いるカレン軍とナワタ（ビルマ）軍がやり合ったんだ」

このレゲーじいさん、日本人を懐かしく思うのか、いろいろと世話を焼いてくれる。今朝は餅米を炊いて、大ぶりのおこわのおにぎりを作ってきてくれた。「うまい、うまい」と喜ぶ私に、六十年近い昔の話をしてくれる。

「おまえさんは身体が大きいな。昔このあたりに来たプコー（日本人 カレン語で「短足」の意）は、みんな小さかったよ。でも、プコーは勇敢だったなあ。それでもなあ、プコーは、村の人をつかまえては殴ったり、ひっぱたり、ずいぶんとひどいこともしたんだよ。だから我々は英軍と一緒に日本軍相手に必死で闘ったぞ」

「私はプコーというより、タコー（長足）だ。だから逆に前線に行くのが怖い臆病者なんだ」

そんなレゲーじいさん、急に声を荒げて、聞いてきた。

「きさま！きおつけ！だまれ！ばか！これはどういう意味なんだ？」

一月二日深夜、ざわざわと人声がした。ボ・ジョーが帰ってきたのだろうか。村の人が来たのだろうか

- 28 -

か。すぐにざわめきは止んだ。寒さと眠気のため確認のため起きあがること出来ず。囲炉裏のすぐ横で、猫と一緒に丸くなって再度寝入る。

六時過ぎ、私の寝ている小屋に人の出入りが多くなり、ようやく起き出した。小用を足しに表に出てみると、ボ・ジョーがたき火に当たっている。やっぱり昨日の夜、帰ってきたのだ。それにしても夜通し歩きっぱなしだったのだろうか。やはりビルマ軍の基地を攻撃しに行っていた。一月一日の交戦の様子を聞いてみた。

ボ・ジョーは今回、六〇名の兵士を率いてビルマ軍の基地に奇襲攻撃をしかけた。しかしカレン軍の持っていた四つのRPG砲のうち三つが正常に作動しなかった。たった一つの砲でビルマ軍の六〇ミリ砲と対峙しなければならなかった。最後は手榴弾を抱えてビルマ兵に一〇mの距離まで接近する戦法もとった。しかし、火力の差で敗退。十分な武器さえあれば勝てた戦闘だった、という。KNUの総司令部に武器の補給をかけたとしても、彼の要求は叶えられない。KNUは財政的に逼迫しているのだ。

カレン軍の惨敗だった。カレン側に死者五名、負傷者十三名の惨敗だった。ゲリラ戦としては大敗である。やはり、ボ・ジョーと一緒に、今回の戦闘について行かなくてよかった。ジャングル戦だっただろうし、今思っても足手まといになっていたのは明

白だ。一緒に戻ってきた若いカレン兵も、心なしか疲労の色が顔に浮かんでいる。一緒に行動を共にしていたはずのデイゲは、戦闘で足を痛め、途中の村で休んでいるという。さらに、その日の午後、ボ・ジョー司令官は倒れた。

明くる日、ボ・ジョーが私に尋ねてきた。

「そういえば、君も一九六三年だったね」

「そう、あなたと同じ三月生まれです」

「三月か」

「そう、あなたが六日だけお兄さんです」

彼の目が優しく笑った。三〇年前、ほとんど同じ時期にこの世に生を受けたボ・ジョーと私。歴史には「もし」という言葉は許されない。しかし、である。

「もし、私が日本でなくカレンに生まれていたら」

そう思うのは、私のおごりであり、傍観者の立場を明瞭にあらわしているにすぎない。彼はそんな私の思いを見透かすかのように聞いてきた。

「もし、君が私の立場ならどう行動する」

（「本当は闘いたくないんだ」司令官としては部下の前では決して口にできないことを私に訴えていた。そんな彼に、私は答える言葉がなかった。だが、彼は、自分の力を確信するかのようにつづけた。

「人間は何かを成し遂げたいと思っただら、いいとき

もある。悪いときもある』、そのことを覚悟しておくべきだ。人は死ぬまで学ぶことができるから、諦めてはだめなんだ」「戦いが終われば、農夫にでもなりたい。でも、でも、いろんな事を知りたいから、機会があればもっと勉強したい」

彼は話の中で、ふと、そんなことを漏らした。

「カレン民族の為」。そんな大義より、村人を守りたい。普通の暮らしがしたいと銃を持ったボ・ジョー。しかし、兵士になったのも、司令官の役割を背負ったのも、彼は、自らが選んだ道でもある。ボ・ジョーは、敢えてそういうそういう選択肢をとった。そして今、自分の覚悟とカレンの将来を常に口にする一人の司令官となった。そんな彼の人間性をもっともつと知りたいと思う。

- 31 -

ちに遭った。子どもたちは安全のため、タイ側の難民キャンプに住み込んで、キャンプ内の学校で勉強を続けるようになった。彼女は自分の孫に会うため時々、サルウィン河を下り、タイ側のキャンプ時々渡っていく。

「ホロー・クロー」という名のサルウィン河はまた、違う歴史をカレン人に与えようとしている。その昔、モンゴルからサルウィン河を下ってきたカレンの歴史があった。彼女もまた、歴史の一部として、ビルマ軍に迫害されながらも、ビルマ側からタイ側へ流されていく運命を背負っているようだ。歴史書には記述されないが、抵抗する歴史と流される歴史がここにもあるのだ。

(19997字)

- 32 -

翌日、再会の約束をして、ボ・ジョーと別れた。タダダー村を後にして二日目、パラダ村という名の小さな村にたどり着いた。チデトウさん(五十三前後)さんという女性の家に泊めてもらった。

彼女は、祖母の代からこの村に住んでいる。野菜を売るためタイ国境に出かけることも多く、タイ語、ビルマ語、カレン語を自由に話す。自分のお母さん、おばあさんと同じように、いつまでもこの村で平穏に暮らしていきたいと言う。

ところが二年前、村の小学校がビルマ軍の焼き討